

① ボランティアに対する被災者のニーズは、どう移り変わっていますか。記事中から抜き出しましょう。

当初は住居周りが多かったが、最近
は水路の泥出しなど農地関連に移
ってきている。

② 何がボランティアを動かすの
が、ボランティア自身から語ら
れています。その部分を抜き出
しましょう。

地域を笑顔にする (という目的)

③ この記事の主見出しを考え、上部の四角の中に入れてみましょう。

記事上部を参照。「日田を元気に」という見出しの意図を感じてもらえればと思います。

被災者に笑顔の力

民間ボラセン活動5ヵ月

「まだ手助けが必要」

福岡・大分豪雨から7ヵ月。復興の進む日田市だが、被災地にはなお課題がある。災害後に結成され、活動が5ヵ月を超えた民間団体「ひちくボランティアセンター」の取り組みをリポート、被災地に残る課題について考える。

福岡・大分豪雨
向き合う
ボランティアが
見た被災地
= 上 =

地域と考える
支社局リポート

ひちくボラセンのメンバーは日田出身・在住者9人で、うち約半数は20代。9月から大鶴公民館を拠点に週末に活動。被災者から依頼を受け付け、支援者を募ってきた。

昨年未だに延べ1615人のボランティアを受け入れ、108件の依頼を解決した。しかし、未解消のニーズは常に30件ほどあり、横ばい状態。当初は住居周りが多かったが、最近水路の泥出しなど農地関連に移ってきている。「山が崩れたままの場所もあれば、自宅や農地が復旧していない人もいる。被災者からは次の梅雨時期に対応できるか心配する声も聞く。また手助けが必要」と江田泉代表(50)。

1月中旬、今年初めての活動があった。1度に満たない冷え込みの中、センター



活動するひちくボランティアセンターメンバーと市内外から集まったボランティア=日田市大鶴地区

のメンバーを含めた18人は声を掛け合いながらスコップや荷物を軽トラックに積み込み、農業用水路の復旧のため大鶴地区の上宮町へ向かった。豪雨直後から毎週末参加する「常連」の一人、由布市庄内町大龍の内田正寿さん(51)は「地域を笑顔にするという目的を見いだしてからは、自然に日田へ足が向かうようになった」と話した。

作業中もメンバーたちは笑みを絶やさない。彼らのパワーが復興の追い風になっている。

昨年7月の豪雨で、日田市内では住宅53棟、非住宅46棟が全壊、517棟が床上浸水、260棟が床下浸水した(1月26日現在、罹災証明書発行の内訳)。みなし仮設住宅への避難者は58世帯153人(同日現在)。市は1月31日、復旧・復興計画を発表した。

(2018年2月6日付朝刊日田玖珠面)